

「七月のキノコ(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

キノコといえば、秋に多く発生すると思われている。しかしこれは人の「感覚的なとらえ」或いは「ことわざ」に近いものだと思う。実は「キノコは一年中存在する」というのが正しい見方だ。しかしこの「一年中」には実は、二つの意味がある。

一つ目は、菌類の生活の方法の問題だ。「キノコ(木の子)」というのは、生物学の用語ではなく、菌類のある状態(器官)を表す言葉…いわば「あだ名」のようなものである。菌類は土の中や枯れ木の内部に、「菌糸」と呼ばれるネットワークを張り巡らしている。一年のうちのほとんどの時期は、この「菌糸のみ」で生活している。つまり、菌類の本体(実体)は菌糸そのものに他ならないのだ。



写真は、「カワリハツ」というキノコの根元と、土の中を観察したところだ。キノコの本体の下の土の中には、白い菌糸がぎっしりと詰まっていた。

菌糸そのものも、土や倒木の内部で、周囲の養分を摂取してどんどん成長する。この状態を「菌糸のまん延」という。シイタケやナメコの栽培では、原木(コナラ材やブナ材)に「たね駒」と呼ばれる菌糸の元を打ち込んで、それがまん延するのを待つ。まん延すると、キノコが発生する。野生の菌類も同じだ。

このキノコの部分は「子実体」と呼ばれ、「孢子を製造し、拡散させるための器官」である。子孫を増やす為に現れた、菌体のごく一部なのだ。顕花植物で言えば、「花や果実」に相当する部分だ。



写真は「モリノカレバタケ」というキノコが、直径50cmほどの環になって発生した様子だ。菌糸が土の中に同心円状に成長し、その末端(最も新しいところ)に子実体が発生するのだ。つまり、菌体は少なくとも直径50cmの大きさにまん延していることになる。これを「菌輪」といい、多くの菌類で同じような現象が見られる。キノコは孢子を飛ばす一時期にしか見られなくても、菌糸本体は一年中存在しているのだ。

二つ目は、キノコは種類によって、春夏秋冬いつでも見られるということである。



写真は「アミガサタケ」というキノコで、春の代表的なキノコである。特に珍しいキノコではなく、公園や空き地、それに庭先でも、ごく普通に見られる。普通のキノコのように、弾力のある革質の茎や傘を持たず、ロウ細工のような華奢な体つきだ。分類上は

「子囊菌類(門)」に属し、生殖的(孢子のできかた)には、カビに近い原始的な仲間と言える。

「冬専門」の変わったキノコが「エノキタケ」だ。エノキタケというと、暗いキノコ工場で栽培された「もやし」しか思い浮かばないが、野生のエノキタケはシイタケのように茶色く大きなキノコで、冬に発生する。別名「ユキノシタ」とも呼ばれるキノコだ。